

編集後記

絶望のなかで希望をいかに見いだすことができるか。閉塞をどのように打破することができるか。問題はわかっているが、答えが見つからない。これらの難問に直面したとき、私たちには二つの道が残されている。一つは歴史に答えを求めること、もう一つは同時代を生きる他者に学ぶことである。

日本に希望を見いだせない現在、道標を示してくれるのは、南アジアに住む人々かもしれない。南アジアの人々は、我々の想像を絶する貧困、差別、暴力、圧政に直面してきた。グローバル化の時代を迎えてからは、グローバル資本の圧力、これと結託した国家の弾圧に吹き飛ばされそうになっている。しかし、彼らはそこであきらめない。巨大な力を前に、およそ無意味な抵抗であることは十分に承知しつつも、抵抗することをやめない。独自のネットワークを構築して、不正義に立ち向かう。失敗すれば、新しい方法を編み出して再び挑む。ここに見られるのは、自分たちの社会を自分たちの力で変えるという信念であり、民主主義への信頼である。

本号の特集「国際関係のなかのインド」は、そのような南アジアのたくましさを国際関係を軸に描き出した。大国の支配に呻吟しつつも、与えられた状況のなかで可能性を見だし、ネットワークを構築し、未来に賭ける南アジアの人々を縦横に活写している。投稿された論文一本、研究ノート三本からも、私たちは現在に至る南アジアのダイナミズムを改めて学ぶことができるだろう。

本号は新たな試みとして、書評コーナーを設けた。「現代インド地域研究」の何よりの目的は、日本における南アジア研究者のネットワークを密にし、活発な議論を通じて南アジア世界に対する理解を深め、南アジアの知識と経験を日本に、そして世界に発信していくことである。本企画がその一助となることを編集委員として切に願っている。

最後に私事を申し上げることをお許しいただきたい。私は、創刊号から編集委員として本誌の編集に携わってきたが、本号をもって交代することになった。私にとって編集委員を務めることは初めての経験であり、それまで投稿の対象であった学術誌を最初から作っていく作業がいかに大変であるか、身に染みてわかった。未熟な編集委員であったが、それでも何とか務めることができたのは、三尾稔編集委員長をはじめとする編集委員、そして編集幹事の皆さんに助けていただいたおかげである。この場を借りて御礼申し上げたい。誠にありがとうございました。私と同じく今号で交代する押川文子先生、澤宗則先生、いつもの確なご指摘をいただき大変勉強になりました。石坂晋哉さん、細心の注意を要する編集幹事を長い間務めていただき、本当にありがとうございました。

『現代インド研究』は、これからも続いていく。日本の南アジア研究をより活発にする学術誌として、今後ますますの発展を祈念したい。(N)